

物語を実在の歴史に転換した H・シュリーマン（1822―190）

### 商人として成功

古代ギリシヤの盲目の吟遊詩人ホメロス（図1）が紀元前八世紀の後半に記述したとされる物語『イリアス』は翻訳された日本語版でも約五〇〇ページになる大作ですが、ペロポネソス半島に存在するギリシヤ王国連合とアナトリア半島に存在するトロイア王国の約一〇年にもなる戦争を叙述した内容です。数多くの神々が登場するので、神話の一種と理解されていましたが、これを実在の歴史の物語だと理解した人物が存在しました。

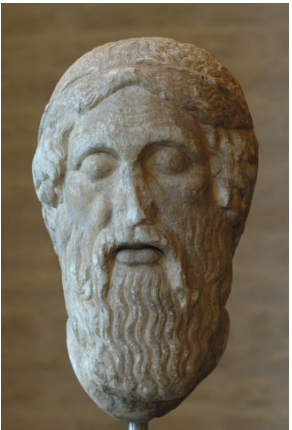


図1 ホメロス

その人物とは一九世紀に世界を闊歩したハインリヒ・シュリーマンという人物です。ドイツ北部のユトランド半島の付根に一四世紀から存在したメクレンブルクIIシュヴェリーン大公国のプロテスタントの牧師であった父親のエルンスト・シュリーマンの九人兄弟の六男として一八二二年に誕生しました。一三歳になった三五年に地元の学校に入学しますが、貧乏であったため翌年に退学し、食品会社で徒弟として勤務します。

しかし、貧乏から脱却しようと一八四一年に南米のベネズエラに移住するため渡航しますが、大西洋上で帆船が難破、オランダの領有する小島に漂着し、そこに立地していたオランダの貿易会社に入社しました。ある程度の収入も確保できたので、子供

時代からの女性の友達と結婚しようと連絡すると、直前に結婚したということが判明しました。この失恋の痛手から回復するためシュリーマンは貿易の仕事に没頭するようになります。

そのためには世界各国の言葉を習得する必要があると必死に勉強し、自伝では一五言語を自在に駆使できるようになったと記載されていますが疑問とされています。しかし、商売の才能は優秀で、ロシアに移住してインドの藍色の染料の輸入で成功、さらに一八五三年に勃発したイギリス・フランス・トルコなどの連合とロシアとのクリミア戦争ではロシアに武器を密輸して大儲けし、四一歳になった一八六三年に商売から引退しました。

### 世界一周旅行で日本を訪問

大金を手中にしたシュリーマンは一八六五年から世界一周旅行に出発します。インドを経由して海路で香港、上海、天津に立寄りながら北京に到着し、万里の長城を見物して六月一日に横浜に到着しました。五九年に外国に開港してから六年が経過していた横浜は辺鄙な漁村から多数の外国人の人々が集散する港町に発展しており、ここでシュリーマンは長崎にグラバー商会を創設したT・B・グラバーとも出会っています。

何事にも関心をもつシュリーマンは日本の庶民の家庭なども見物していますが、大変な行事を見物する機会がありました。第一四代將軍徳川家茂が京都の孝明天皇に拝謁するため、六月一〇日に横浜付近の東海道を通行するというのです。混乱の発生を阻止するため外国の人間の見物は制限されましたが、イギリス領事が幕府から許可を取得し、その一人としてシュリーマンも保土ヶ谷で一七〇〇名にもなる將軍の行列を見学したのです。

さらに生糸の産地を見学するため八王子を訪問し、江戸の見物にも出掛けています。当時は幕末の緊迫した情勢のため外国の人間の江戸訪問は禁止されていましたが、アメリカ代理公使の手配で許可を取得し、警護の五名の役人とともにアメリカ公使館となっていた麻布の善福寺に到着、愛宕山、日本橋、浅草寺などを見物します。約一ヶ月の滞在を終了し、横浜からサンフランシスコに航海、アメリカ大陸を横断して、翌年、パリに到着しました。

### トロイア戦争の物語

これ以後、シュリーマンは生涯の事業となるトロイア遺跡の発掘に集中します。その活動を説明するために『イリアス』で展開される物語を紹介します。出発は全知全能の神ゼウスが地上で増加しすぎた人口を減少させるために戦争を勃発させる策略

を考案したことです。そこで戦争の契機とするため、トロイア王国の王子パリスに三人の女神ヘラ、アテナ、アフロディテを対面させて最高の美人を選択させる「パリスの審判」を実行します（図2）。



図2 パリスの審判（ルーベンス 1636）

三人は自分を選択してくれた場合、ヘラはアジア全域の支配の権利を、アテナは戦争で常勝する能力を、アフロディテは世界で最高の美女をパリスに贈呈すると約束しますが、パリスはアフロディテの提案を選択しました。そこで彼女はスパルタ国王メネラオスの夫人ヘレネがパリスに夢中になるように仕向けます。国王が不在の時期にスパルタを訪問したパリスはヘレネに出会い、恋仲となった二人は一緒にトロイアに帰還してしまいます。

夫人を略奪された国王メネラオスは武将オデュッセウスを同伴してトロイアに向きヘレネを返還するように交渉しますが成功しませんでした。そこでスパルタを中心とするペロポネソス半島に存在する国々が協力してトロイアと対戦することにし、大將は武勇で名高いミケーネ国王アガメムノン、副將はメネラオスで、一〇万人規模の兵士と約一二〇〇隻の軍船からなる艦隊を編成、エーゲ海域を横断してトロイアに到着します。

浜辺に到着した艦船から最初にプロテシラオスが上陸してトロイアの大將ヘクトルと対戦しますが、討死してしまいます。しかしアキレウスの奮戦などもあり、ギリシャ連合が優勢になったため、トロイア王国の軍勢は城壁の内部に退却し城門を閉鎖してしまいました。アキレウスはトロイア王国周辺の国々を攻撃して陥落させますが、

トロイア王国の堅固な城壁は容易に突破できず、膠着状態のまま九年が経過してしまっています。

この長期の戦争を決着させたのが「トロイアの木馬」作戦です。トロイアではウマが神聖な動物とされていました。そこでギリシャ連合は内部に少数の精鋭の兵士が潜伏した巨大な木馬を製作して城門の前面に放置し（図3）、軍隊は付近の小島に撤退しました。トロイアの軍隊は木馬の処理について、焼却する、破壊する、城内に搬入するという三案を検討しますが、結局、第三に決定し、城内の広場に移動させ、トロイアの兵士たちは勝利の宴会を開催しました。



図3 トロイアの木馬

夜半になり木馬の内部に潜伏していた兵士が外部に進出して内側から城門を解放し、沖合の小島に待機していたギリシャ連合の兵士たちが上陸して飲酒で泥酔していたトロイアの兵士を殲滅します。トロイア国王プリアモスは神殿に逃避していましたがアキレスの息子ネオプトレモスに殺害され、トロイア王国は滅亡しました。このように紹介してくると、神々の世界と人間の世界が渾然一体となっており、ホメロスの『イリアス』は架空の物語のようです。

### 遺跡の発掘に成功

しかしシュリーマンは現実の物語だと確信します。そこで日本を訪問した翌年の一八六六年にフランスのソルボンヌ大学とドイツのロストック大学で古代の歴史を研究して博士の学位を取得します。そして七〇年からアナトリア半島のエーゲ海側のピナルバシュという場所を発掘しますが成果はありませんでした。しかし同様にトロイ



ア遺跡を探索していたイギリスのアマチユア考古学者F・カルヴァートの示唆でピサルルクという場所に目標を変更します。

そこはカルヴァートが以前から細々と発掘していた場所ですが、資金不足で深部まで発掘されていませんでした。そこでシュリーマンは一八七〇年に正式の発掘許可を取得し、豊富な資金を投入して次々と下層へ発掘を展開していきます。上層は古代ローマ時代の遺跡で、下層になるほど過去に遡行し、九層の遺跡を確認しますが、その第八層には火災の痕跡があったので、それがトロイア戦争の火災で消滅したトロイアの都市遺跡だと推定します。

そうするとトロイアという都市国家が存在したのは紀元前二六〇〇年から二二五〇年という時代になってしまい、間違いだったということが判明します。後程の研究によって紀元前一三〇〇年から一九九〇年の第七層から火災の痕跡や虐殺の証拠が発見され、トロイア戦争時代の遺跡であったと修正されます(図4)。トロイア戦争が実在し、ホメロスの著作が架空の物語ではなく史実であったことが明確になり、シュリーマンは一気に有名になります。



図4 トロイアの遺跡

### さらなる遺跡の発掘に挑戦

前述のように、シュリーマンは古代ギリシャの歴史について博士の学位を取得して豊富な知識がありました。発掘調査など実務の経験はなく、かつトロイア戦争が架空の物語ではなく実在したという証拠の発見を最大の目的としていたため、遺跡の途

中の階層を乱雑に発掘して損傷していますし、最初は第七層がトロイア戦争の時代の遺跡ではないと判断していたために一部を破壊してしまい、後世の研究に支障をもたらしたという問題がありました。

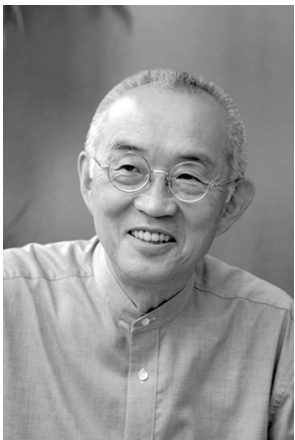
さらに出土した財宝は遺跡の存在するオスマン帝国に無断でギリシヤに搬送されたため、オスマン帝国は発掘の権利を剥奪してしまっています。しかし発掘継続のためシユリーマンは発掘した財宝の一部を返還するとともに、代金を支払って発掘を継続しました。シユリーマンが確保した財宝は一八八一年にドイツへ搬送されベルリン国立博物館で展示されていましたが、一九四五年にソビエトが自国に運搬し、現在、モスクワのプーシキン美術館に展示されています。

さらにシユリーマンはトロイア戦争でギリシヤ軍団の大将であったアガメムノンの墳墓を発見するため、ペロポネソス半島北部のミケーネ遺跡を発掘し、二頭の獅子の彫刻で装飾された城門や巨大な円形墳墓を発見します(図5)。ここからは多数の黄金製品が発掘され、ホメロスが「黄金の豊富なミケーネ」と表現していることを裏付けています。しかし、この遺跡はトロイア戦争より数百年前の存在と推定され、アガメムノンとは関係ないことが判明しています。



図5 ミケーネの城門

一八八四年からはミケーネ文明の盛期の遺跡であるティリンス遺跡を発掘し、壮大な宮殿の存在を明確にしました。さらに古代ギリシヤの遺跡の発掘を構想していましたが、一八九〇年に旅行途上のナポリで急死し、アテネの墓地に埋葬されました。現代の基準からは発掘方法や発掘した宝物の処理に問題があったものの、だれもが架空の物語と理解していたホメロスの物語が歴史の事実であったことを個人の資産で証明した偉大な人物でした。



つきお よしお 1942年名古屋生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002、03年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリーをしながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主催し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本 百年の転換戦略』（講談社）、『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』、『水の話』（遊行社）、『100年先を読む』（モラロジー研究所）、『先住民族の叡智』（遊行社）、『誰も言わなかった！本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』（アスコム）、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』（致知出版社）、『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本 地域創成の展望』（東京大学出版会）など。最新刊は『凜凜たる人生』（遊行社）。